



春彼岸

3月21日(土)太陽の塔 桜ヶ丘三階本堂において春季彼岸会が行われました。お彼岸には、阿弥陀さまの大悲願をいただき、亡

き先人を偲びお墓参りをして、法話を聞かせていただきます。その時は、仏さまを尊びご先祖さまに感謝する気持ちがあるのですが、しばらく日



常生活を送るとその気持ちも薄れてしまうものです。聞いてすぐ忘れてしまうことを、網目から水が漏れてしまうように、「か」「や」「ざる」にたとえることがあります。蓮如聖人は、「そ

第八十五号 会報 浄土真宗 太陽の会

れならば、そのかごを水につけるように、わが身を仏法に浸しておきなさい。」と仰られています。試験勉強のように一言一句を正確に覚えようとするのではなく、繰り返し聞くといい姿勢で良いと仰ってくださいているのです。

これを親鸞聖人は、「香りが自然に染み込むように、私たちが念仏申すものに育てあげてください。如来の知恵のはたらき



である」と仰られています。また、法然聖人は、知恵第一の法然房と仰がれながらも、自らのことを凡夫と仰られています。それは、どれだけ修行に

あけくれようと煩惱が湧き上がってくる自らのすがたを自覚されていたからです。毎日の生活でお念仏の生活をしていけたらいいのですが、忙しさに追われて大切なことも後回しになってしまう私たちです。それなら、せめて仏教週間であるお彼岸にお参りいただき、少しでも仏法にわが身を浸していただければと思います。春のお彼岸は1年の中でも気候の良い時期で作物の種まきにも最適です。私たち自身の心にも仏種(仏性)を植えていただきお彼岸のご縁に少しずつ膨らませていただけたら幸いです。



報恩講

1月16日(金)に太陽の塔 桜ヶ丘において報恩講を執り行いました。

親鸞聖人は1263年1月16日に往生されました。その三十三回忌である1294年に覚如上人は『報恩講私記』を著され、「報恩講」という言葉はそこから由来しています。『報恩講私記』は『報恩講式』ともいわれ、「講式」とは、仏さまや高僧方のお徳を讃えるために書かれた文章のことをいいます。覚如上人(第三代門主)は、親鸞聖人三十三回忌に際して、親鸞聖人の恩徳を讃えられたのです。当初、「報恩講」は親鸞聖人の毎月のご命日におつとめされていましたが、蓮如上人のころから、年に一度、祥月命日にかけて七昼夜お勤めするようになりました。現在西本願寺では、毎月16日のご命日とその前日には「宗祖月忌

法要」、毎年1月9日から16日にかけて行われます。「報恩講」を「御正忌報恩講」として執り行い全国から多くの方々、西本願寺に参拝されています。浄土真宗の門徒として「報恩講」は最も重要な年中行事の一つです。覚如上人が親鸞聖人三十三回忌から始められ七百余年の時が流れます。親鸞聖人の教えはお念仏によつて誰もが救済されるという教えです。誰しもが救われる阿弥陀さまの救いと親鸞聖人の功績に感謝し今後、皆様と報恩講を勤めさせていただきます。



これからの行事

○本山(福山)

降誕会 五月二十三日(土)

開式 十時

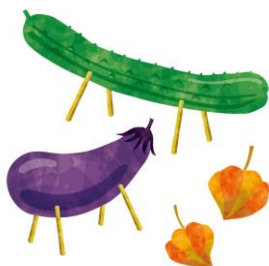
盂蘭盆会 八月十四日(金)

開式 十時

○川上太陽霊園(鹿児島)

盂蘭盆会 八月八日(土)

開式 十時



*お経本は当会でも準備させていただきます。お参りください。はじめてお参りの方もどうぞ気軽にお参りいただけましたら幸いです。

僧侶のひびり

2026年2月6日から26日にイタリア北部の都市のミラノ、コルティナ・ダンペッツォで4年に一度の冬季オリンピックが開催されました。8競技116種目の競技が行われ、冬季競技選手の熱戦に心が熱くなりました。とくに、フィギュアスケートペアにおいて歴代最高点で金メダルを受賞した、リクリゆうこと三浦璃来選手と木原龍一選手の演技は多くの国民に感動を与えたことと思います。

しかし、この感動を巻き起こしたオリンピックでも多くの政治的な争いに影響された場面が垣間見られました。オリンピック憲章では競技や競技場内での政治的な干渉は禁止されていますが、そ

れだけ世界の情勢は不安定になっているのかと感じられました。

仏教では、一貫して「殺してはならぬ。また他の人が殺害するのを容認してはならぬ」という「不殺生」を解きます。仏教の理想は『無量寿経』に説かれますように「仏が歩み行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれな場所はない。そのため世の中は平和に治まり武器をとって争うこともなくなる」とあります。世界では宗教を起点とした戦争が多くありますが、仏教は戦争の起点となつたことはありません。

ロシアのウクライナ侵攻も5年目になり、いまだに終結していません。また、年明けにはアメリカによるベネズエラへの軍事行動やイランへの攻撃。遠く離れた日本から

は何が正しい情報なのかも判断が難しい状況ですが、僧侶として平和を願わずにはられません。

この世界情勢の中、これまで通りの生活が保障されないことに不安を大きくされるのは当然のことだと思います。しかし、かつて見ていた将来は本当に確かなものだったのでしょうか。私たちは常に変わりゆく、不確かで思い通りにならない現実を受け入れながら歩みを進めています。だからこそ社会、他人、自分の基準を一旦わきに置いてもらい仏さまの「真実」の基準に出会い、ありのままの私を照らしていただける毎日を感じていただくことが救いとなるのです。



五月〜七月のことば

太陽の会では、館内入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらつしやるとは思いますが、身近なやさしいお言葉として興味を持っていただき皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【五月のことば】

信じるということば

聞くほかはない

「桐溪順忍」

信心は「うたがいがはれる」「うたがいがまじわらない」ということを言われます。それは、「明日のお天気は晴れです」というのを「信じる」のではない。「今のお天気は晴れです」と言われることを「信じる」ともいわない。「今のお天気は晴れです」と言われたならば、「は

い、そうですね」と「聞く」(頷く)以外にありません。

【六月のことば】

人間とは

自分で自分の始末を

仕切れぬ者の別名である

「高光大船」

私たちは、生まれていくことも死していくことも、何一つ自分の思い通りにすることはできません。また『仏説無量寿経』には、「人、世間愛欲のなかにありて、独り生れ独り死し、独り去り独り来る。」とあり、人のいのちというものは究極的に「独り」であると教えられます。その「独り」たるいのち同士がであい、関係し合って、支ええられながら生きています。けれども、最期はまた「独り」でいのちを終えていくのです。

【七月のことば】

浄土とは違ったものが

違いをもったまま

調和することができる世界

「坂東性純」

タンポポがバラの花を咲かせることはできませんが、バラもタンポポの花を咲かせることはできません。タンポポがバラの花を咲かせる必要はありませんし、バラもタンポポの花を咲かせる必要はないのです。タンポポはタンポポとして輝き、バラはバラとして輝く。違うもの同士、それぞれが唯一無二のものとして、最高の輝きを放ちながら共存している、それが浄土の世界です。

